

句碑:松尾芭蕉 「春もやや気色とどのふ月と梅」

本句碑は、寛政4年(1792)に建立され、県内最古級と推定されます。刻まれた句は、厳しい冬が過ぎ、徐々に春めいてくる早春の情趣を、月と梅の取り合せて描き出している、芭蕉が好んだ画賛句の一つです。句出典は『薦獅子(こもじ)集』(元禄6年(1693)刊行)、『旅館日記』六年一月にあたる条に「梅月」と前言して出された芭蕉50歳の時の作品で、裏面には「太無」「秋瓜」の句と、熊谷を拠点として活躍した俳人「官鯉」「笑牛」「雪呬」の名が刻まれています。



句碑:斎藤紫石 「老いらくの苔に花咲く心地かな」



本句碑は、昭和34年(1959)5月に斎藤紫石後援会により建立されました。熊谷市鎌倉町に生まれた斎藤紫石(1885-1964)は本名を茂ハといい地方行政の草創期を担った新市制の熊谷市長として知られています。俳句に親しみ、紫石と号し俳誌「鮎」を刊行、政界引退後、市内石原に「紫石巢」と称する寓居を構え、独自の俳句を探求するため幽居生活を送り、熊谷市第1号名誉市民として本市の文化振興にも尽力しました。刻まれた句は、晩年の心境を詠んだ美意識溢れる一句となっています。

句碑:山口青邨 「夕紅葉鯉ハ浮くまま人去りぬ」

本句碑は、昭和57年(1982)10月に夏草埼玉県支部によって建立されました。刻まれた句は、俳人の山口青邨が、昭和25年(1950)11月に星溪園を訪れた際に詠んだ句で、庭の中央にある「玉の池」の水面に映る夕紅葉と行き交う鯉の様子を情感込めて表現しています。山口青邨(1892-1988)は盛岡市生まれで、古河鉱業、農務省に勤めた後、東京大学教授となり鉱山学を担当しました。昭和22年(1947)、水原秋桜子らと「東大俳句会」を興し、高浜虚子の指導を受けて『ホトギス』の代表的俳人として活躍しました。



歌碑:鹿兒島寿蔵

「熊谷草なくてかなはじと星池に植ゑて福布くしき花を咲かしむ」



本歌碑は、平成31年(2019)3月、鹿兒島寿蔵熊谷草歌碑建立呼び掛け人によって熊谷草(クマガイソウ)の保存活動を顕彰するために建立されました。熊谷地域での熊谷草の保存は、1970年代後半から地元の愛好団体を中心に始められ、昭和54年(1979)に

熊谷草保存会が結成され、熊谷の各地に株を植栽し、花を咲かせる活動を進めてきました。「星溪園」などへの植栽も続けられましたが、ついに根付かず保存会は平成26年(2014)に解散しました。アララギ派の歌人だった鹿兒島寿蔵が星溪園を訪れた昭和55年(1980)5月、熊谷草の保存活動に想いを寄せてこの短歌を残しました。歌意は「熊谷草がなくてはならないと星溪園に熊谷草を植えてふくよかな花を咲かせている」であり、この歌は保存活動の励みになったといわれています。

ご利用案内

- 庭園の開園時間
午前9時から午後5時まで(11月1日から2月末日までは午後4時まで)
- 建物の利用時間
午前9時から午後9時まで(茶室・立礼席は午後5時まで)
- 休園日
月曜日(この日が休日の場合は翌日)
年末年始(12月27日から1月4日まで)
(入園は無料。建物等施設を利用する場合は有料)



交通のご案内

- JR高崎線熊谷駅から徒歩18分 / 秩父線上熊谷駅から徒歩3分
- 国道17号線 本石二丁目交差点から約100m(無料駐車場6台)

名勝 星溪園

所在地: 〒360-0046 埼玉県熊谷市鎌倉町32番地
問合せ: 電話048-536-5062(熊谷市立江南文化財センター)

令和4年3月発行



熊谷市指定文化財 記念物

名勝 星溪園



熊谷デジタル
ミュージアム



SEIKEIEN



星溪園は池泉回遊式庭園で、熊谷市の産業・土木面に大きな功績を残した竹井澹如翁によって慶応年間から明治初年にかけて造られました。池泉回遊式とは、庭園の作庭方法の様式で、池の周囲に通路を巡らし、園内を回遊しながら観賞できるように構成されています。

星溪園の由来

元和9年(1623)、荒川の洪水により当園の西方にあった土手(北条堤)が決壊し、池ができました。その池は清らかな水が湧き出ることから、「玉の池」と呼ばれ、この湧き水が星川の源となりました。江戸時代の終わり、竹井澹如が、そのほとりに別邸を設ける計画を立て、玉の池を中心に樹木を植え、名石を集めて庭園としました。明治17年(1884)に当時の皇后(昭憲皇太后)が来訪され、大正10年(1921)には秩父宮が宿泊されたほか、渋沢栄一、大隈重信、陸奥宗光など多くの知名士の来遊がありました。昭和25年(1950)、熊谷市が譲り受け、昭和29年(1954)に市の名勝に指定されました。平成時代に入り、建物と庭園の整備がなされ、建物は数奇屋感覚を取り入れ、格調高い風格を併せ持った文化教養の場として復元されました。

創設者・竹井澹如

竹井澹如は、天保10年(1839)、群馬県甘楽郡南牧村羽沢の豪族市川家に生まれました。幼名は萬平(まんべい)であり、筆名などでは幽谷(ゆうこく)と号しました。慶応元年(1865)、27歳のとき熊谷宿の本陣をつとめた竹井家の当主となり、明治12年(1879)には、初代の県会議長をつとめました。その後、政府の要職などをすすめられるものの、終始一貫して熊谷地域のために貢献しました。渋沢栄一ら経済人との交流、熊谷県庁の誘致、旧熊谷堤の修築と桜の植樹、養蚕業の振興、私立中学校の創設など多岐に渡って地域市民への貢献を果たし、大正元年(1912)8月に永眠されました。



星溪寮

せいけいりょう

庭園内にある3棟の建物の中で中心的建物であり、12畳半の一間を中心に、二の間・前室・茶室(小間)・立礼席等があります。縁側には、月見台が置かれ、借景を生かし、より庭園美との調和が図られています。また、木造建築の美と格調の高さを感じられます。

面積: 160.8㎡(約48.7坪)



積翠閣

せきすいかく

松風庵の北に位置し、当初は、昭和5年(1930)に澹如の長男の耕一郎氏が建てた高床式の建物です。和室と洋室によって構成された折衷型の建築様式で、南東側に月見台があり、庭園と玉の池を眺望でき、静かな情緒が味わえます。1階のギャラリーには星溪園や澹如等の資料が展示されています。

面積: 72㎡(約21.8坪)



松風庵

しょうふうあん

2室から構成される庵室で、星溪寮と積翠閣との間に位置し、数奇屋の建物です。廊下の上部には梁が露出し、近代和風建築の粋が感じられます。また、前庭には燈籠が置かれ、落ち着いた和みの空間を醸し出しています。

面積: 42.9㎡(約13坪)



庭園

庭園には、様々な植物が植栽され、自然豊かな森を形成しています。約40個の庭石と、灯籠・層塔・十王供養塔など約20個の石造品があります。また、星溪寮の前庭には、袖振り石・天柱石があります。これらは、文禄の役(1592~3年)に加藤清正が朝鮮から持ち帰ったもので、忍城主の松平忠吉が譲り受け、後に澹如が引き継いだものと伝えられています。

総面積: 3,847㎡(池の面積: 1,020㎡)